

教育と研究の狭間

高部英明

「宇宙」の研究会に出て感心するのは若い人が元気なことです。学生が自分なりの意見を持っています。素人ながら私も宇宙の勉強をしたいと思うとBlue Backsは山ほどあり、有名な先生達が味のある筆で興味をそそってくれます。むしろ、どれを選べば良いか迷ってしまう。BlueBacksで物足りない時は、ほどほどに専門的な入門書も揃っている。素人の私にも星の進化のシナリオがおぼろげながら掴めてくる。ぐっと専門的になると、岩波の現代物理学講座などがいい参考書になる。

若い研究者が常に育っていく環境が整備されていて始めてその研究分野は成長して行く。江戸時代、関孝和は高等数学に達していたにもかかわらず、書物で広く伝えることなく、門人にしか伝えず発展しなかった。学問分野を広げるのは時代が変わっても書物であることに変わりはない。

センターの全国共同利用研構想が進む中、「レーザー核融合とはレーザー・プラズマとは何だろう？」と興味を持つ学生・研究者にBlue Backsから専門書までリストアップ出来るだろうか。「Zeldovich & Raizerの本が良いですよ」と30年も前の本しか推薦できないようではなさない。地道に学問の正道を行く「レーザー核融合教科書作成委員会」でも作って次代を担う学生、研究者に何を伝えて行くか集大成することが大学附置の研究所に要求されているのではないのでしょうか。また、それが長い目で見てレーザー核融合研究発展につながると思います。

学生もせつかく2年、3年とレーザー研で時間を過ごすわけで、自分の研究の位置付け、全体像を掴みたいという要望を前面に出してみてもどうだろうか。若い人が元気のいい研究分野は必ず発展します。研究と両立させながらいかに知識を伝承して行くか、教育と研究の狭間で苦悩する事が我々に要求されているようです。